

若手研究者インターナショナル・トレーニングプログラム (ITP)

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成20年度派遣報告書

——ベトナム・ベトナム国家大学ハノイ校ベトナム学・発展科学院,
ベトナム語, 派遣期間 (2008. 12. 3-H21. 3. 14)——

平成20年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程1回生
小田 なら

自身の研究テーマについて

私は、ベトナムの「伝統医学」の形成過程とそれが現代社会でいかに受容・利用されているかという現状を探りたいと考えている。

ベトナムでは伝統医学が人々の身近にあり、在来の薬草治療の経験知が人々の間に浸透している。これはハノイの市場で必ず薬草が売られていたり、一般的な病院に伝統医学科が設けられていたりすることからも見て取れる。また、政府や医師・研究者は近代西洋医学と伝統医学を融合させた医療を生み出そうとしている。

現在ベトナムでは、「南薬」「北薬」「西薬」の3つの医学が公的に病院や医学教育の中で利用されている。これらはそれぞれベトナム由来の薬を使った治療、中国医学、近代西洋医学と分類されるが、南薬は中国支配に抗する一つ的手段として「北薬」に対抗して形成されてきたという経緯がある。しかし南薬と北薬は、伝統医学あるいは「民族医学」として括られ、フランス植民地期と戦争を経て公的な医療制度に取り入れられた。そこには戦争中に財や物資が不足していたため、薬草の知識が伝承されていたという背景もある。

ここで私は①医学教育の中での「伝統医学」の教育史と医療制度史②現地の一般の人々の生活の中に見られる伝統医療の経験知識の二点に主眼をおく。究極的には、歴史的要素が絡んで形成された伝統医学を近代西洋医学と共に利用している事例を明らかにし、近代西洋医学とそれ以外のものを組み合わせた医療制度を考える一助としたい。

研修言語の概要

ベトナム語は声調言語の一つである。共通語では六つの声調を持ち、母音は10以上あるが文法は複雑ではない。中国支配下から20世紀初頭に「科挙の制度」が廃止されるまでは漢字が公式文字だったが、

漢字を加工して音や意味を表した「字・喃^{チュノム}」もあった。現代ではこれらに替わり「字・^{チー}国語^{クックグー}」という

ローマ字と記号を用いる。北部・中部・南部の方言は発音・声調の相違が大きく、単語も異なることがある。

語学研修の内容について

まず、先生と受講するレベルと授業日数を相談し、マンツーマンで二時間の授業を週三回受けた。教科書は会話練習が中心の初級コースのものを使用した。ハノイ出身の三人の先生が交代で担当し、授業時間や進め方は全て相談の上で決められた。授業の説明は英語せざるをえなくなった時を除き、ベトナム語で進められた。当初の授業は日本で事前に学んだものとレベルに大差はなかったが、発音の指導により重点が置かれた。

慣れてくると、インタビューに必要な依頼文・疑問文を作文し添削してもらうこともでき、研究に関する自由会話も増えた。たが、教科書以外の内容に熱心に取り組む先生とそうではない先生に分かれたため、担当の先生によって依頼する内容を変えていった。

期間中にはテストが行われた。二冊ある初級コースの教科書の一冊目が終わった段階と期間の最後に二回行われ、穴埋め式の文法問題と聞き取り・読解・作文について出題された。

連絡は携帯電話を使っていたが、当日になって先生が欠席を知らせる、あるいは休み明けに忘れていたという事態もあった。その時は代わりの日・先生を見つけてもらうよう頼み、授業数を確保した。

授業場所は中心部からやや離れた大学本部か、中心部寄りの教室かを選ぶことができる。派遣先の研究科は中心部に近い他の大学の建物の一室を借りていたため、私はそちらの方で授業を受けた。

研修中印象に残った出来事

まず、到着した次の日から開かれた「ベトナム学国際学会」を聴講させて頂いたことが挙げられる。英語の発表しか理解できなかったが、多岐に渡る分野のベトナム研究者の話聞くことができた。また、日本の学会とはかなり異なる運営を見ることで「ベトナム流」の物事の進み方を体感できた。さらにそこで出会ったベトナム人のお陰で、研究に有益な情報を得ることもできた。この学会は、研究上もベトナムの生活環境に慣れる上でも貴重な体験であった。

もう一つ、現地で紹介されたベトナム人家庭に間借りしたことが挙げられる。家にいつもいる大家の女性はベトナム語しか話さないの、否が応でもベトナム語を話す練習となった。しかも、彼女は話し方を外国人用に変えることもなかったの、よい練習になったと思う。帰国の数日前に「来たときは全くしゃべれなかったのに、話すようになったじゃない」と言われたのは、当然のことであっても嬉しく感じられた。

目標の達成度や反省点

渡航直後から少しずつ会話の能力は向上したが、ベトナム語の音声にはなかなか慣れることができなかった。帰国直前によりやく少しは会話を続けられるようになったといえる。反省としては、旧正月(テト)やフィールドスクールに参加したため二週間ほど休講が続き、中だるみしてしまった点が悔やまれる。

また、事前には研究に関する現場へ先生を連れ出して実地に学ぼうと考えていたが、実現できなかった。マンツーマン形式ゆえに自由に授業内容を変えられるものの、ベトナム語でうまく伝えられない段階では、先生とある程度親しくならなければ臨機応変に提案することは難しいのではないかと思う。

もう一つの授業内容の反省では、読解にあまり力を入れられなかった点が挙げられる。研修期間の最後の方で、今後は専門書を一緒に読むと良いとようやく言われたのだった。今後、派遣者が読解力もつきたいのであれば、事前に希望をはっきり伝えておくことが必要だろう。



写真1：ベトナム学発展科学院が借りている教室。



写真2：他の教室では、外国人向けにさまざまなレベルのベトナム語クラス（別の大学の管轄下）が開講されていた。



写真3：1対1の授業。



写真4：サテライト教室は学生街にあるが、幼稚園や小学校もある。ベトナムの学校は二部制であるため、午前と午後一度ずつ、このような「お見送り・お迎えラッシュ」がある。